手話言語を獲得・習得する子どもの力研究プロジェクト

企　　画：	河﨑佳子	神戸大学大学院　人間発達環境学研究科
	久保沢寛	NPO こめっこ（特定非営利活動法人手話言語獲得習得支援研究機構）
司　　会：	久保沢寛	NPO こめっこ
話題提供者：	河﨑佳子	神戸大学大学院　人間発達環境学研究科
話題提供者：	酒井邦嘉＃	東京大学大学院　総合文化研究科
話題提供者：	武居渡	金沢大学　学校教育系
指定討論者：	小田侯朗＃	元愛知教育大学

[企画主旨]

聴覚障害児の母語（自然獲得言語）は手話である。言語は誰から教わらずとも生活環境の中で自然獲得されるものであるが，きこえない子どもに関しては，そうした環境が確保されない状況がほとんどである。また，聴覚障害児にとって手話言語の獲得・習得は，思考力を含むさまざまな認知発達，対人関係や自己認識等人格形成にも大きな影響を及ぼすと考えられる。しかしながら，その影響や効果についての実証的研究はほとんどない。そこで，大阪で実施されている乳幼児期手話言語獲得支援事業「こめっこ」*に参加する聴覚障害児を対象に，脳科学，言語獲得，学習能力（思考力），心理発達（人格形成）の 4 分野から「手話言語を獲得・習得する子どもたちの力」にアプローチする研究プロジェクトを計画した（日本財団助成事業）。

今回は，各分野の研究責任者が話題提供を行い，聴覚障害児教育を専門とされる小田侯朗氏に指定討論をお願いしている。参加者の皆さんとともに議論を行いたい。

［話題提供］

・脳科学と学習能力（思考力）　酒井邦嘉氏

口話法や手指日本語と異なり，手話がろう者に必要な言語であるということは，地球が太陽のまわりを回っているのと同じくらい確かな，「科学的事実」である。本講演では，言語獲得の生得性がすべての学習能力（思考力）の基礎となっていることを明らかにしたうえで，手話が自然言語であることの脳科学的検証について紹介する。この「こめっこ」研究プロジェクトでは，実際の教育現場を模したパイロット研究を実施しながら，聴覚障がい児の学習理解における「手話のできる教員」ないし「授業における手話通訳」の必要性を学問的に明らかにする計画である。

・言語獲得　武居渡氏

聞こえない子どもたちにとって，手話と日本語の 2 つの言語をしっかり身に着けることは，聞こえない子どもたちの自己実現の大きな武器となる。そこで本研究では，「こめっこ」に参加している聞こえない子どもたちの手話と日本語の力を，種々のテストバッテリーを使って定量的に測定し，2 つの言語の発達過程を明らかにするものである。手話と日本語についてはこれまでイデオロギー的に語られることが多かったため，本研究では定量的なデータをもとに両言語の関係を明らかにしたい。

・心理発達（人格形成）　河﨑佳子氏

発達早期に家族と共に手話言語のあふれる支援の場に出会い，ろう者（手話を母語とするネイティブサイナー）とのやりとりや遊びをとおして手話言語を自然獲得する子どもたちが，手話を習得しながら子育てを始める親のもとで成長するプロセスを，愛着形成，認知，コミュニケーション，対人関係，自己認識等，複数の発達ラインから捉える縦断的研究を行う。子どもの観察，発達検査，保護者からの聴き取りによるデータ収集を開始し，後に性格検査等も織り込む予定である。

＊日本特殊教育学会第 56 回大会(2018)　「手話言語のあふれる早期支援事業(1)(2)」（河﨑他）
＊日本特殊教育学会第 57 回大会(2019)　「手話言語のあふれる早期支援事業(3)(4)(5)」（河﨑他）

Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

手話言語を獲得・習得する子どもの力 研究プロジェクト

企 画: 河﨑佳子 神戸大学大学院 人間発達環境学研究科
久保沢寛 NPO こめっこ（特定非営利活動法人手話言語獲得習得支援研究機構）

司　　会: 久保沢寛　NPO こめっこ
話題提供者: 河﨑佳子　神戸大学大学院 人間発達環境学研究科
話題提供者: 酒井邦嘉＃　東京大学大学院 総合文化研究科
話題提供者: 武居　渡　金沢大学 学校教育系
指定討論者: 小田侯朗＃　元愛知教育大学

企画趣旨①　課 題

聴覚障害児の母語は（自然獲得言語）は手話である。言語は誰から教わらずとも生活環境の中で自然に獲得されるものであるが、きこえない子どもに関しては、そうした環境が確保されない状況がほとんどである。また、聴覚障害児にとって手話言語の獲得・習得は、思考力を含むさまざまな認知発達、対人関係や自己認識など人格形成にも大きな影響を及ぼすと考えられる。しかし、その影響や効果についての実証的研究はほとんどない。

企画趣旨②　研究プロジェクトの目的

- そこで、2017年度から大阪府手話言語条例の施策として実施されてきた乳幼児期手話言語獲得支援事業「こめっこ」を舞台に、脳科学、言語獲得、学習能力（思考力）、心理発達（人格形成）の４分野から「手話言語を獲得・習得する子どもたちの力」にアプローチする研究プロジェクトが企画されることになった（日本財団助成事業）。
- その目的は、聴覚障がい児の真の言語力を適正に評価する研究を行うこと。

研究体制について

大阪府手話言語条例評価部会

▼

手話言語を獲得・習得する子どもの力の研究に関する専門分科会

→研究体制確保のため、2020年度より設置されました。

研究専門分科会の委員

○河﨑　佳子　<心理発達>
（委員長　研究統括）

○酒井　邦嘉　<脳科学><学習能力>
（東京大学大学院　教授）

○武居　渡　<言語獲得>
（金沢大学　教授）

○古石　篤子
（慶應義塾大学　名誉教授）

○阪本　浩一
（大阪市立大学大学院　病院教授）

○飯泉　菜穂子
（国立民族博物館　特任教授）

「こめっこ」とは？

◎大阪府乳幼児期手話言語獲得支援事業「こめっこ」
2017年６月に大阪でスタート
（2020年３月まで 日本財団助成事業、2020年４月より大阪府委託事業）
対象：聴覚に障害のある未就学児とその家族 等
目的：親子間の愛着形成と子どもの手話言語獲得支援
活動：月２回（土曜日）

◎「べびこめ」（BABYこめっこ）（大阪府委託事業）
2018年４月スタート
対象：聴覚に障害のある 0～3歳児とその家族 等
目的：子どもの手話言語獲得支援 および 保護者の手話習得支援
活動：当初週１回　→　現在週２回

大阪府乳幼児期手話言語獲得支援事業

きこえない・きこえにくい子どもたちとその家族が、手話とろう者に出会える場

「こめっこ」

Communicative Members, Kirari Kids of Osaka

コミュニケーションの芽を育む子どもたち

2017.4～2020.3　日本財団助成事業
2020.4～　　大阪府委託事業（NPOこめっこ主催）

「こめっこ」とは？

◎大阪府乳幼児期手話言語獲得支援事業「こめっこ」
2017年６月に大阪でスタート
（2020年３月まで 日本財団助成事業、2020年４月より大阪府委託事業）
対象：聴覚に障害のある未就学児（０～６歳）とその家族 等
目的：親子間の愛着形成と子どもの手話言語獲得支援
活動：月２回（土曜日）

◎「べびこめ」（BABYこめっこ）（大阪府委託事業）
2018年４月スタート
対象：聴覚に障害のある 0～3歳児とその家族 等
目的：子どもの手話言語獲得支援 および 保護者の手話習得支援
活動：当初週１回　→　現在週２回

べびこめ　（2018. 4 に始まった活動）

対象は、主に、0～3歳のきこえない子どもをもつ家族

現在は
週2日午後

◎ 保護者の手話習得支援

◎ 子どもの発達やかかわり方等に関する、個別相談支援

◎ 手話のあふれる環境でのあそび
（ネイティブサイナーとのふれあい）

大阪府の委託事業

こめっこ

聴覚活用（補聴器や人工内耳）と
手話言語獲得は
両輪をなすもの

現在の「こめっこ」

2020年2月　NPOこめっこ 設立

（特定非営利活動法人手話言語獲得習得支援研究機構）

BABYこめっこ（べびこめ）

こめっこ

MOREこめっこ（もあこめ）

大阪府立福祉情報コミュニケーションセンター

「もあこめ」とは？

「手話言語を獲得・習得する子どもの力研究プロジェクト」
（日本財団助成事業）の一貫として実施

2020年４月スタート
対象：聴覚に障害のある小学生、または聴覚に障害のある
　　きょうだいをもつ小学生
目的：手話言語の獲得・習得支援
活動：月２回（土曜日）および月２回（平日）

Supported by
日本財団
THE NIPPON FOUNDATION

MOREこめっこ （2018. 4 ～）

就学後も、きこえない子どもたちが集い、

手話であそび、手話で語り合う。

手話で学び、手話を学ぶ。

知識を広げ、思考力を磨く。

（日本財団助成事業）

Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

企画主旨③

今回のラウンドテーブルでは、<脳科学><言語獲得><学習能力> <心理発達>各分野の研究責任者が話題提供を行い、本研究プロジェクトを紹介する。

そして、聴覚障害児教育を専門とされる小田侯朗氏を指定討論者に迎え、参加者の皆さんとともにディスカッションを行いたい。

日本手話を母語とするろう児に対する質問–応答関係検査の実施方法の提案

手話を獲得しつつある聴覚障がい児の手話言語発達の語用論的側面を評価するために

〇久保沢寛[1]・武居渡[2]・物井明子[1]＃・河﨑佳子[3]
([1]特定非営利活動法人手話言語獲得習得支援研究機構・[2]金沢大学・[3]神戸大学大学院)

目的

外山・久野・知念・佐竹（1994）は，就学前児のコミュニケーション能力を語用論的な観点からとらえる言語発達検査として，10 の課題（57 の下位項目）からなる「質問–応答関係検査」（以下，TQAID とする）を開発した。これは，幼児の会話能力を測る検査である。ただし，日本語での施行を前提としているため，日本手話を獲得しつつある子どもの会話力を評価するためには，日本手話を用いた検査方法が必要となる。これまでに手話力を評価するためのテストバッテリーとして，「日本手話文法理解テスト」（武居，2010）や「手話版語彙流暢性検査」（武居，2017）などが考案されてきたが，語用論的観点から手話でのコミュニケーション能力を評価する検査は未だ存在しない。そこで，TQAID を手話母語話者に使用する場合の方法を提案したいと考えた。本発表では，TQAID を日本手話で実施する具体的な検査方法を検討した内容を報告し，14 名の子どもに試行した結果と今後の計画を述べる。

日本手話を用いた TQAID 実施の提案

TQAID は，「I.日常的質問」「II.なぞなぞ」「III.仮定」「IV.類概念」「V.語義説明」「VI.理由」「VII.説明」「VIII.系列絵」「IX.物語(桃太郎)の説明」「X.文章の聴理解」の 10 課題から構成される。その下位項目である 57 の質問を手話翻訳した。翻訳作業においては，視覚言語である手話の写像性の問題，文法の正確さに加えて，対象児の年齢に即した手話表現の工夫が必要である。そのため，ネイティブサイナーと日本語話者であり心理学や教育学を専門とする研究者との議論によって，それぞれの項目を手話に翻訳した。以下，その過程で検討が必要になった点について述べる。

「I.日常的質問」「III.仮定」「IV.類概念」「VII.説明」「VIII.系列絵」「IX.物語(桃太郎)の説明」の各項目については，手話翻訳に困ることはなく，容易に翻訳することができた。

「II.なぞなぞ」は 4 項目からなるが，そのうちの 3 項目「雨の日にさすものは何？」「鋏を持っていて，横に歩く生き物は何？（解答はカニ)」「美味しい飲み物が通る細長いトンネルは何？(解答はストロー)」について，手話での表わし方が議論となった。「雨の日にさすものは何？」に関しては，「さす」の手話が「傘」の手話表現と重なり，そのまま翻訳すると解答を伝えてしまうので，「雨の日に使う…」と代替した。カニとトンネルの 2 項目に関しては，それぞれ手話翻訳を検討し，カニは「生き物です。鋏を持っていて，横に移動する。これは何？」と表現し，トンネルは「長い筒です。その中を車が通るのではなく，飲み物が通る。これは何？」と表現することにした。

「VI.理由」については，1 項目「どうして出かけるとき，鍵をかけるの？」の翻訳において，「鍵をかける」の部分を，「鍵を鍵穴に差し込んで回す ＋ 鍵をかける」の手話表現にすることで，より課題の意味が伝わるようにした。

「V.語義説明」は 4 項目からなる。「包丁」は手話表現がそのまま語義説明につながるため，手話で表現せず，写真を掲示することにした。他の「財布」「病院」「旅行」については，まず手話で問い，対象児が手話を理解できなかった際には，写真を提示することにした。

「X.文章の聴理解」は，日本手話での施行においては「手話談話の理解」とし，課題文の内容を日本手話に翻訳した。他の課題と比べて長文表現となるため，検査者が対象児の力に合わせて表現を変えてしまう等の恐れを防ぎ，表現の統一を図るため，課題文と質問の手話教示をビデオ撮影し，その映像をパソコン画面に提示することにした。

日本手話版 TQAID の試行結果と今後の計画

14 名に実施した結果,「II.なぞなぞ」のカニとトンネルの問題については,正解できた子どもはなく,質問の意味が伝わっているか,「なぞなぞ」として成立する翻訳となっているかの判断が難しかった。そうした点でさらに検討する余地はあるが，総合的には，手話母語話者の会話能力を測る検査として使用可能と判断できた。今後，手話を獲得しつつある子どもの会話能力を評価する検査として実施し，多くのデータを収集して分析する予定である。

Supported by
日本財団
THE NIPPON FOUNDATION

日本手話を母語とするろう児に対する質問一応答関係検査の実施方法の提案

手話を獲得しつつある聴覚障がい児の
手話言語発達の語用論的側面を評価するために

〇久保沢寛[1]

武居渡[2]・物井明子[1]・河﨑佳子[3]

[1] 特定非営利活動法人 手話言語獲得習得支援研究機構

[2]金沢大学・[3]神戸大学大学院

目　的

外山・久野・知念・佐竹（1994）は，就学前児のコミュニケーション能力を語用論的な観点からとらえる言語発達検査として，10の課題（57の下位項目）からなる「質問−応答関係検査」を開発した。

これは，幼児の会話能力を測る検査である。ただし，日本語での施行を前提としているため，日本手話を獲得しつつある子どもの会話力を評価するためには，日本手話を用いた検査方法が必要となる。これまでに手話力を評価するためのテストバッテリーとして，「日本手話文法理解テスト」（武居，2010）や「手話版語彙流暢性検査」（武居，2017）などが考案されてきたが，語用論的観点から手話でのコミュニケーション能力を評価する検査は未だ存在しない。

そこで，TQAIDを手話母語話者に使用する場合の方法を提案したいと考えた。本発表では，TQAIDを日本手話で実施する具体的な検査方法を検討した内容を報告し，14名の子どもに試行した結果と今後の計画を述べる。

日本手話を用いたTQAID実施の提案

　TQAIDは，「Ⅰ.日常的質問」「Ⅱ.なぞなぞ」「Ⅲ.仮定」「Ⅳ.類概念」「Ⅴ.語義説明」「Ⅵ.理由」「Ⅶ.説明」「Ⅷ.系列絵」「Ⅸ.物語(桃太郎)の説明」
「Ⅹ.文章の聴理解」の10課題から構成される。
　その下位項目である57の質問を手話翻訳した。翻訳作業においては，視覚言語である手話の写像性の問題，文法の正確さに加えて，対象児の年齢に即した手話表現の工夫が必要である。
　そのため，ネイティブサイナーと日本語話者であり心理学や教育学を専門とする研究者との議論によって，それぞれの項目を手話に翻訳した。
　その過程で検討が必要になった点について述べる。

「Ⅰ.日常的質問」

名前や性別、家族構成など

「Ⅲ.仮定」

コップのジュースをこぼしたらどうする？など

「Ⅳ.類概念」

果物、水の中に住む生き物を各５語、発言

「Ⅶ.説明」

お風呂に入る順番などお話ししてもらう

「Ⅷ.系列絵」

４枚の絵カードを順番に並べ、絵カードが何をしているかなどを質問する。

「Ⅸ.物語(桃太郎)の説明」

→

手話翻訳に困ることはなく，
容易に翻訳することができた。

「Ⅱ.なぞなぞ」

4項目のうち3項目

（1）「雨の日にさすものは何？」

（2）「鋏を持っていて，横に歩く生き物は何？（解答はカニ）」

（3）「美味しい飲み物が通る細長いトンネルは何？(解答はストロー)」

→

手話での表し方が議論となった。

「Ⅵ.理由」

2項目のうち1項目
「どうして出かけるとき，鍵をかけるの？」

より、課題の意味が伝わるように表現した。

「Ⅴ.語義説明」

4項目からなる。

「包丁」

→ 手話表現がそのまま語義説明につながるため、写真を提示。

「財布」
「病院」
「旅行」

→ 手話を理解できなかった際には、写真を提示。

「Ｘ.文章の聴理解」

課題文は４つあり、

質問は、13項目ある。

「手話談話の理解」とする。

課題文と質問の手話教示を

ビデオ撮影し、その映像を

パソコン画面に提示した。

「Ｘ.文章の聴理解」の手話教示ビデオ

日本手話版TQAIDの試行結果と今後の計画

　14名に実施した結果，「Ⅱ.なぞなぞ」のカニとトンネルの問題については，正解できた子どもはなく，質問の意味が伝わっているか，「なぞなぞ」として成立する翻訳となっているかの判断が難しかった。

そうした点でさらに検討する余地はあるが，総合的には，手話母語話者の会話能力を測る検査として使用可能と判断できた。今後，手話を獲得しつつある子どもの会話能力を評価する検査として実施し，多くのデータを収集して分析する予定である。